

ニオン

12版▲◎

2018年(平成30年)5月12日(土)

享月

日

新

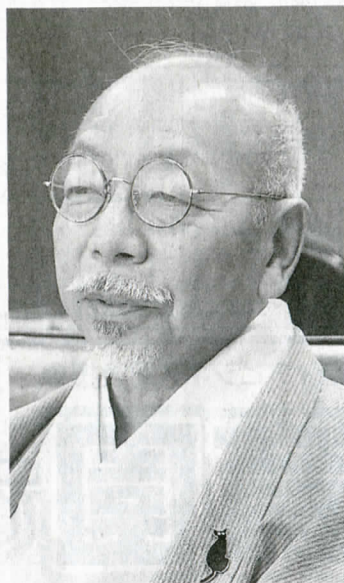
聞

オン&フォーラム

きものの産業 これからも

二

高い・着にくい 古い商慣習



1950年生まれ。きもの小売りチェーンの「やまと」社長を経て、2010年から現職。著書に「きものの森」。

性は振り袖が大多数で、花火大会ではゆかたなども縮小しています。美意識のゆりかごだ産業を、この先も残す手だてを考えます。

きものの市場規模はいま、2700億円ぐらいとされています。最盛期の7分の1に減りました。ただ、この5、6年は下げ止まったと認識しています。

業界の最盛期は約40年前で、ピークに至る上昇期に三つのホームランがありました。

一つめは1959年の皇太子さまのご成婚。美智子さまがきものをお召しになり、空前の婚礼きものブームになりました。二つめは64年の東京五輪。コンパニオンが着用したのが振り袖でした。三つめは60年代末。団塊の世代が成人式を迎え、多くの女性が振り袖を着ました。太平洋戦争が終わり、日本社会の欧米化が進んでも、市場は拡大し続けていたのです。フォーマルなきものが、家族の

きものチェーン「やまと」会長

やじま たかとし
矢嶋 孝敏さん

なぜ？

計画の中に入ったからです。先を見通した長い計画ですから、多少高くても許される。特別な美しさがあるけど高額で、庶民には高嶺の花だった絹のきものに手が出せるようになったという側面もあります。そのころ登場したクレジット、月賦というしくみも購買を助けた。これを、私は最盛期の年代から「77年型成功モデル」と名づけています。

「イン会社を経営していました。きもの世界に入り、なんて見えない業界かと感じました。契約書を出していないし、支払いもいい加減。お客さまから見ても品質や価格が透明でない。長く続いてきた商慣習を改善しよう」と、私も加わった経済産業省の協議会が昨年5月、適正な代金支払いなどを求める17条の指針を公表しました。業界に呼びかけている中で、成人式の振り袖が着られない「はれのひ」事件が起こった。委託取引が非常に増えている状況が背景にあります。責任意識を欠く業者には商品を流さないモラルが必要です。

しかし、70年代後半から世の中が大きく変わります。低価格、パソナルの方向に進みました。電卓の価格が下がり、使い捨てライターが出て、ウォークマンが発売されました。服の世界ではジーンズとスポーツウエアが流行し、イージー化が始まります。ところがきものはこうした流れに乗らず、高額のままでしたから、需要を下げてしまった。ホームランの夢が忘れられなかったのでしょうか。下り坂で在庫がだぶつくなか、古い商慣習も足を引っ張ったと思います。私は88年に父を継いで社長になるまでは、子ども服のチェ

もっとも、きもの自体にも難点があります。値段が高い、一人に着られない、手入れが大変。それらに対応し、お客さまの数を増やして市場を拡大することを私は経営方針としてきました。具体的には、絹以外の手入れしやすい素材を使いカジュアルにし、値段を下

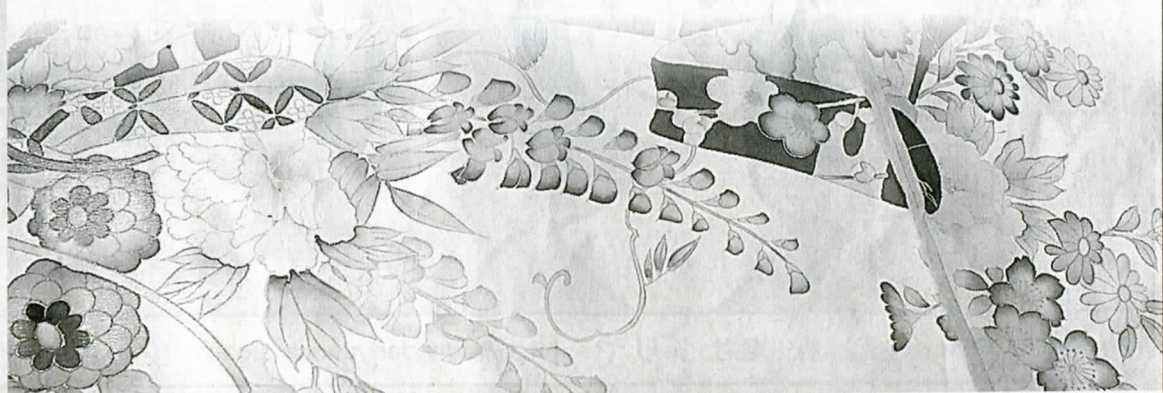
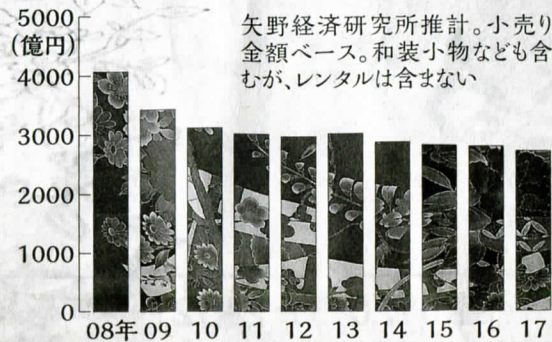
けて買いやすいステップを数多く
つくりました。その結果、この15
年でお客さまは1店当たり7割増
え、総計約50万人になりました。

近ごろ東京の花火大会では、若
い女性の8〜9割がゆかたを着て
います。安くて、一人で着られ
て、手入れが簡単。難点への対策
が全部入っています。ここ数年は
若い男性が着る比率も上がりまし
た。機能的で着やすい洋服だけで
はつまらないのかもしれない。
若い人は、いつもの自分と違う自
分に出会える非日常性を、求めて
いるのだらうと思います。

ただ、国内のきもの産地は中小
・ 零細企業が多く、危機的な状況
が続いています。十数力所になっ
た産地が消滅したら、きものを売
る私の会社もなくなってしまふ。
いま、全国の産地で人を育てよう
と動いています。まず約10年かけ
て後を継ぐ経営者を育成し、その
後、産地ごとに技術者養成の支援
を始めました。ものづくりをしな
い国が栄えたためしはない。私の
信念でもあります。



国内の呉服小売りの市場規模



複雑な工程 I Tで効率よく



1968年生まれ。大学卒業後約2年間IT企業に勤め、実家の岡山工芸へ。意匠・営業を担当。2013年から現職。

手描き京友禅「岡山工芸」社長

おかやま ま き
岡山 摩紀さん



解く

和服を着ることはありますか。成人式の女性姿もよく見かけます。しかし、布地の産地はどつた日本のきもの。伝統的な文化を手がける産

江戸時代以来、約300年の伝統をもつ手描き京友禅を製造販売しています。京友禅は白生地に染料で模様を染める技法で、色彩が豊かなため、きものになると女性を華やかにさせる力があります。

きものは日本の民族衣装ですが、この時代に着ていただくには私たちも変わっていかねばなりません。次の世代に新しい形で受け継いでいくために、伝統的な図柄を生かしながらも新しい配色や構図を取り入れ、素材の研究やITの導入も進めています。

会社は、伝統工芸士である父母が50年前に立ち上げました。母・武子の作品が一つの柱ですが、リーズナブルな価格のものまで、幅広く製造しています。絹だけでなく、ポリエステルにも染色できる

んです。約20人の職人のほか、意匠部や営業部もあり、総勢30人ほどで年に約1万反（1万着分）を製造しています。

また、手描き京友禅の良さをより身近に感じてもらえるように、和装小物も扱っています。

工場を50年続けるのは、大変でした。

製造は職人の分業制で、工程が10以上あります。生地に模様を描き、その線に沿って防染糊を置く（糊置）。生地にはけで地色をつけ、蒸して色を定着させる。その後、染料を挿していく（彩色）。生地がリレーのバトンのように回っていきますが、社内で担うのは図案や糊置、彩色などで、他は社外の約300人とのお付き合いで成り立っています。

ところがいま、ほぼすべての工程で職人が不足しています。うちの工場には20代、30代を中心に、多くの職人希望の方が全国から来られますが、続けられる人はほんの一握りです。1点ずつ手作りで時間のかかる仕事なのに、この数

十年工賃は下がり続けています。不明確な利益配分や過剰な経費負担などの古い商慣習は見直し、業界全体で次世代を育てる環境を整えなければなりません。

こういう状況で社業をシステム化するため、ITを導入しました。最初は、お客さまが希望されるデザインのイメージをCGでつくるところから始めました。5年ほど前からは、工程管理にも利用し、作業の効率を上げ、コスト削減につながっています。

また、50年間描きためた1万8千の図案をスキャンしてデータベース化し、再利用しています。それまで図案は箱に入れて積んでいましたが、下にある昔の箱は出しづらく、見るのは上にある最近の箱ばかり。良いものがあるのに生かせていなかった。ただ、量が多すぎて入力が終わっていません。

システムに入れた情報は、営業担当者が持ち歩くパソコンで見ることが出来ます。「デザインをもうちよつとこうしたい」というお客さまの「もううちよつと」に、様

々な図柄をご提案したり、色を変えたりして、細かいすり合わせが事前にできるようにになりました。伝統技術とIT、どちらが欠けても、成り立たない状態になっています。

京友禅には手描きのほか、模様の彫られた型を使って染める型友禅や、機械で印刷するインクジェット方式もあります。お手ごろな価格になるインクジェットの導入も検討しましたが、機械の進歩が速く、より良い機械の導入競争になつてしまふ。手描きの味わい、温かさという得意なところを伸ばそうと考え直しました。

一般の方のきものへの関心は上がっていると感じます。うちの工場への見学も増えました。昔はこのきものにはこの帯とか決まりがありました。いまは自由でいいんです。ふだんは洋服でも、何かのときはきものを選択肢に入れたいただきたいですね。（聞き手・村山正司）

